



國立國父紀念館

国立国父紀念館

中華民国の「国父」孫文を顕彰する 巨大建築

戦後長らく台湾を統治してきた中国国民党政権が、中華民国建国の父、すなわち「国父」として敬う孫文(1866-1925)の功績を顕彰するために造営した巨大建築です。孫文の生誕100周年を記念する事業として1963年頃から計画が始まり、72年に落成しました。設計を担当した王大閔は、西洋建築の追随でも、中国古代の宮殿の模倣でもない、革命的な新しい中国式建築の創造を目指したとされます。館内には高さ約6メートルもある孫文の銅像が鎮座しており、その前で行われる儀仗兵の交代儀式は観光客の人気を集めています。



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/2243/



エリア

台北市

テーマ

歴史

政治

建築

学びのポイント

1.

孫文の顕彰

孫文は19世紀末、当時の中国大陸の統治者であった満州族の清王朝を打倒し、民主的な共和国を建国する革命を志しました。その後、孫文は憲法を制定して民主的な国家を完成させるためには、一定期間は一つの政党による独裁を経なければならぬという考えも打ち出します。中国国民党はその遺志を継いで、孫文の理想とした中華民国の建国を目指しました。孫文が1925年に亡くなると、中国各地で銅像や記念館が造られ、その功績を顕彰する動きが起きました。中国国民党は、1930年に正式に孫文を「国父」の尊称で呼び始めます。なお、国民党と対立し、後に内戦を経て中華人民共和国を建国する中国共産党も、孫文を「革命の先駆者」として高く評価してきました。

2.

孫文と台湾

孫文は、台湾の統治に直接関わったことはありません。しかし、第二次大戦後に台湾を統治下に収めた国民党は、台湾の人々に「中国人」としての自覚を持つことを求め、教育や文化事業を通じて孫文の功績を強調してきました。台湾と孫文はまったく無関係かという、そうでもありません。国民党による統治が始まる以前、孫文は、生涯で3回台湾を訪れたとされています。その影響力の一例を紹介しましょう。日本の植民地統治下にあった1920年代の台湾において、台湾住民による自治を要求する運動をリードした蔣渭水という人物は、孫文の熱烈な崇拜者であったとされます。孫文の「民主的な政治を追求した」側面は、様々な考えの人々が共通して評価できるポイントになっていると言えます。孫文はアメリカ独立革命の歴史等に学びながら、中国に新しい国家を打ち立てることを目指しました。西洋の思想や制度を受け入れる一方、中国の伝統をどのように維持するかという問題は、政治面だけでなく様々な領域で、孫文の時代から今日に至るまで一貫して引き継がれています。国父紀念館の建築様式から、西洋化と中国の伝統の継承のどちらを優先するかという緊張関係を想像してみるのもいいかもしれません。